

匹見町埋蔵文化財調査報告書第30集

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書 XII

平成12年3月

島根県匹見町教育委員会

匹見町埋蔵文化財調査報告書第30集

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書

平成12年3月

島根県匹見町教育委員会

序 文

今回報告するものは、平成11年度における県営「中山間地域総合整備事業」、そして町土地改良区「三葛地区基盤整備促進事業」の2事業に伴い、国庫補助を受けて実施した発掘調査報告書であります。

本報告のとおり、澄川地区で5地点、三葛地区で1地点の計6地点を調査しておりますが、両地区を合わせて4地点において埋蔵文化財の出土があったようあります。これらの発見されたものは、数量または時期などにおいて調査地点で異なりますが、いずれも地区の歴史を証明するものとして、貴重であるということには間違はないありません。

本町においては、種々の開発事業が進められておりますが、当委員会としましては積極的にそうした事業に先立ち、文化財保護そして保存に努めていかなければならぬと考えております。

このことは過去の歴史的事実を知ることによって、これを踏まえて将来への新たな発展を示唆するものが含まれていると信じるからであります。

最後になりましたが、発掘作業に携わって下さいました作業員の皆さん、そしてご指導いただきました島根県教育委員会の文化財課担当職員、また山口大学の中村友博教授、島根大学の山田康弘助教授にお礼を申し上げ序文と致します。

平成12年3月

匹見町教育委員会

教育長 寺戸 等

例　　言

1. 本書は、平成11年度国庫補助事業として、匹見町教育委員会が行った町内遺跡詳細分布調査の報告書である。

2. 調査は、島根県文化財課の指導と協力を得て次のような体制で実施した。

調査主体	匹見町教育委員会		
調査員	匹見町教育委員会文化財保護専門員	渡辺 友千代	
	匹見町教育委員会主事	山本 浩之	
調査補助員	匹見町埋蔵文化財調査室	栗田 美文	
	" (臨雇)	大賀 幸恵	大谷 真弓
調査協力者		斎藤 美代子	渡辺 鶴
調査指導	島根県教育委員会文化財課		
	山口大学人文学部教授	中村 友博	
	島根大学法文学部助教授	山田 康弘	
事務局	匹見町教育委員会教育長	寺戸 等	
	匹見町教育委員会次長	渡辺 隆(平成11年8月31日まで)	
	"	大谷 良樹(平成11年9月1日から)	
発掘作業員	栗田 定 森脇 雅夫	栗田 勉	栗川 修
	村上 強 桐田 治雄	村上 武司	村上 稔
	岡本 三生 益田 愛子	大谷ミツコ	大谷 紗子
			藤本 和正
			日熊 善大

3. 調査に際しては、土地所有者をはじめとして、地元の方々に終始多大な協力をいただくとともに、また圃場整備事業担当者にもご協力いただいた。ここに感謝の意を表したい。

4. 本書に掲載した配置図は縮尺1/1000のもので、匹見町土地改良区のご協力を得、また調査地点図は縮尺1/25000を使用したものである。

5. 今回の調査地は2地区に分かれていたので、地区で章どりをするといった変則的なものとなつた。また調査地点名は全て小字名をもって称することし、また遺物・遺構の有無にかかわらず、「遺跡」という文語は用いずに、全て「地点」という文語を末尾に附して称することにした。

6. 資料作成等は、匹見町埋蔵文化財調査室の山本・栗田・大賀・大谷の協力を得て、執筆・編集は渡辺友千代が行った。

目 次

第1章 調査の経緯と経過	（渡辺友千代）	1
第1節 調査の経緯		1
第2節 調査の経過		1
第2章 調査地区の環境	（渡辺友千代）	3
第1節 澄川持三郎地区の概要		3
第3章 各調査地点の概要	（渡辺友千代）	5
第1節 山根ノ下地点		5
1. 位置と地形的立地		5
2. 調査の概要		6
(1) 調査区の設定		6
(2) 層序の状況		6
(3) 出上遺物		6
第2節 舟戸地点		8
1. 位置と地形的立地		8
2. 調査の概要		8
(1) 調査区の設定		8
(2) 層序の状況		8
(3) 遺物・遺構の検出状況		8
(4) 実測遺物		11
第3節 小田原地点		13
1. 位置と地形的立地		13
2. 調査の概要		13
(1) 調査区の設定		13
(2) 層序と遺物出上状況		13
(3) 実測遺物		16
第4節 家ノ前・上ノ原地点		18
1. 家ノ前地点の概要		18
(1) 位置と地形的立地		18
(2) 調査の概要		18
2. 上ノ原地点		18
(1) 位置と地形的立地		18

(2) 調査の概要	20	
第4章 二葛地区的五百川地点	(渡辺友千代)	22
第1節 紙祖二葛地区的環境	22	
第2節 調査の概要	22	
1. 地形的立地と調査区の設定	22	
2. 層序の状況	24	
第3節 出土遺物と実測遺物	25	
1. 出土遺物	25	
2. 実測遺物	26	

挿図・図表目次

第1図 調査地点の位置図	1
第2図 分布調査地点と周辺の道路	2
第3図 配置図(1)	4
第4図 上層堆積状況図(1)	5
第5図 出土遺物実測図(1)	6
第6図 配置図(2)	7
第7図 土層堆積状況図(2)	9
第8図 土層堆積状況図(3)	10
第9図 遺構状況図	11
第10図 出土遺物実測図(2)	12
第11図 配置図(3)	14
第12図 土層堆積状況図(4)	15
第13図 出土遺物実測図(3)	16
第14図 配置図(4)	17
第15図 上層堆積状況図(5)	18
第16図 配置図(5)	19
第17図 土層堆積状況図(6)	20
第18図 五百川地点と周辺の遺跡	21
第19図 配置図(6)	23
第20図 上層堆積状況図(7)	24
第21図 出土遺物実測図(4)	25
第1表 出土遺物集計・遺構計測表	13
第2表 出土遺物集計表	24

図版目次

図版1 俯瞰した持三郎地区

図版2 山根ノ下地点

- | | |
|------------------|------------------|
| 1. 北からみた調査地点 | 2. A区の北壁状況 |
| 3. A区の西壁状況 | 4. B区の北壁状況 |
| 5. BI区の完掘状況（南から） | 6. 出土した打製石斧（AI区） |

図版3 舟戸地点

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1. 南西からみた調査地点 | 2. AI区の遺物出土状況 |
| 3. C区の上器出土状況 | 4. CI区の遺構表出状況（北から） |
| 5. CI区の遺構検出状況（北から） | 6. D区の土器出土状況 |

図版4 舟戸地点

- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1. E区の遺構表出状況（南から） | 2. E区の遺構検出状況（東から） |
| 3. A区の完掘状況（南から） | 4. BI区の北壁状況 |
| 5. C区の完掘状況（南から） | 6. DI区の完掘状況（南から） |

図版5 舟戸地点

- | | |
|-------------|-----------------|
| 1. EI区の北壁状況 | 2. F区の完掘状況（南から） |
| 3. 実測土器・石器類 | |

図版6 小田原地点

- | | |
|----------------|------------------|
| 1. 南西からみた小田原地点 | 2. AI区の完掘状況（南から） |
| 3. B区の北壁状況 | 4. C区の北壁状況 |
| 5. DI区の完掘状況 | 6. 実測遺物（C・D区） |

図版7 家ノ前・上ノ原地点

- | | |
|----------------|----------------|
| 1. 南西からみた家ノ前地点 | 2. 北壁の状況 |
| 3. 南からみた完掘状況 | 4. 南西からみた上ノ原地点 |
| 5. 北壁の状況 | 6. 南からみた完掘状況 |

図版8 五百川地点

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1. 西からみた五百田地点 | 2. 東からみた作業風景 |
| 3. AI区に出土した縄文土器 | 4. A区の完掘状況（北から） |
| 5. B区の完掘状況（南から） | 6. 実測遺物 |

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

本事業は、国庫の補助を受けて行うものであつたため、計画書などの提出は平成10年に終えていた。そして、それは平成11年度中に行われる「二葛地区基盤整備促進事業」、そして平成12年から始まる「中山間地域総合事業」(益美地区)に先立って実施するものであったである。

第2節 調査の経過

このうち三葛地区のものは、同年度の9月から基盤整備事業に伴って圃場整備が行われる予定であったため、平成11年4月中旬から同月の下旬にかけて実施したのである。その調査の結果、一部の試掘坑の5層（橙褐色粘質土）から縄文遺物が確認されたのである。また後者は、澄川地区の圃場整備事業に伴って行ったもので、同地区のうち、5地点を選定して実施することにした。その調査は、平成11年12月上旬から平成12年1月中旬にかけて行い、うち3地点から縄文時代の遺物、また一部には道構を検出したのであった。

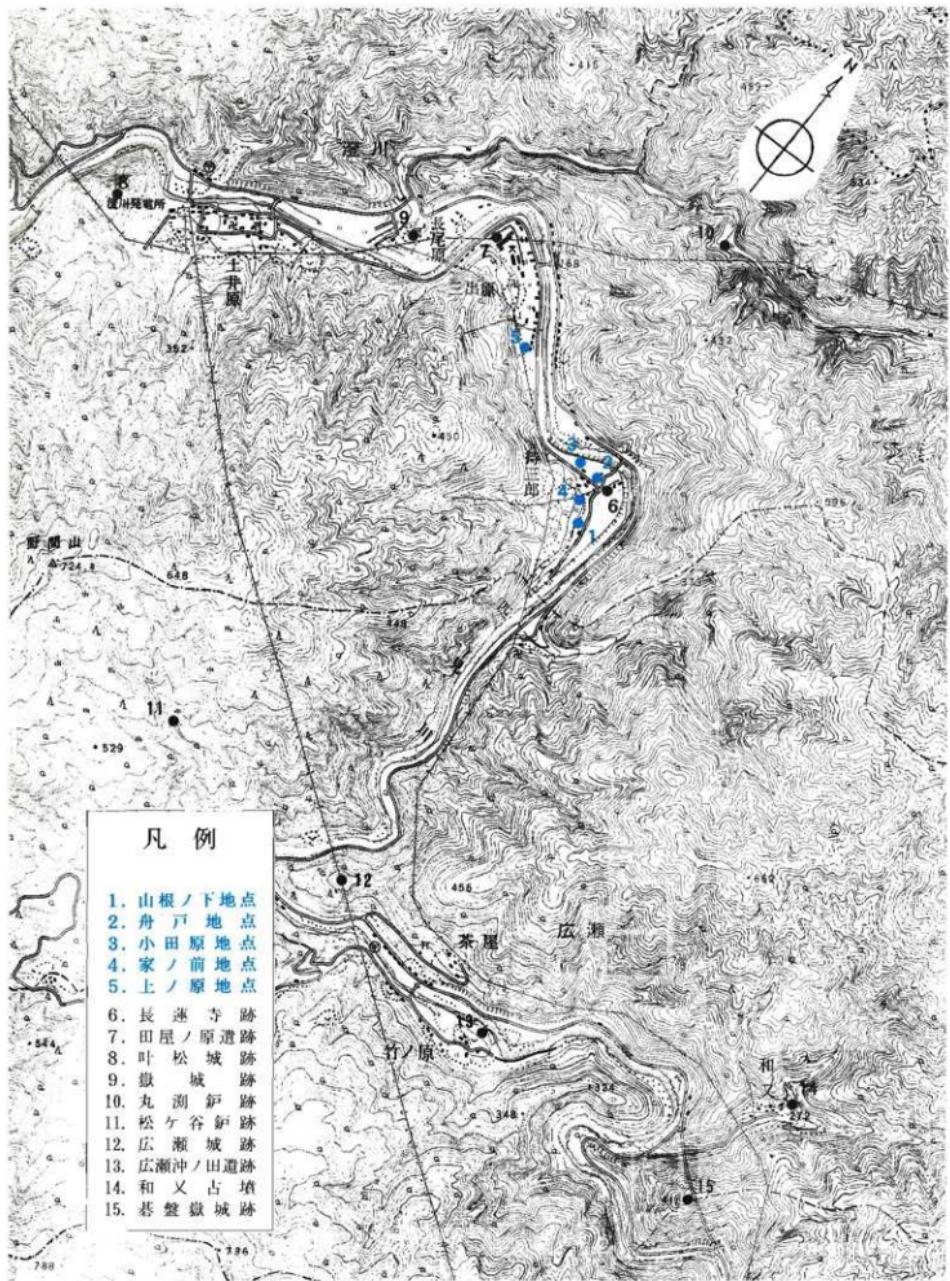
なお三葛地区における調査は、急を要するため同年5月には本格調査へと移向して対応したのであった。そのため已むをえず、本地点のものは概要程度のものとなってしまったので、性格的位置付けなどについては、同年発行の『二葛地区基盤整備促進事業に伴う「五百田遺跡』を参照して補って戴きたいと思うのである。また澄川地区においても、現地調査は年度の後半、それも極めて短期間ということもあって、全体的に概要的なものになったことは、否めない事実となってしまった。

本事業の期間中、同年7月27・28日には島根大学法文学部の山田康弘助教授、また平成12年2月15・16日の両日には島根県教育委員会の守岡正司主事を招請し指導を得た。そして同年2月23・24日の両日には山口大学人文学部の中村友博教授にも来室を願い、とくに出土遺物からの位置付けなどについて御教示をいただいたのであった。

第1図 調査地点の位置図



(渡辺 友千代)



第2図 分布調査地点と周知の遺跡

第2章 調査地区の環境

第1節 澄川持三郎地区の概要

位置と地理的景観 該当地は、町域の北部に位置する島根県美濃郡宍見町大字澄川のうちの、持三郎（もっさぶろう）という小字単位を中心とした小地区である。

そこは南西側の山地が舌状を成して派生しており、宍見川はその端部を比高差約4・5mを測って、大きく蛇行して北西流している。また平坦を成す可耕地は、標高170～176mを測り、大半は水田として拓かれており、また山麓側を中心に10軒ばかりの民家が点在する。そして、その上段部は標高約192m台を測って一部平畠地がみられ、そこは畑地と化され、つまり2段からなる河岸段丘に形成されているという景観に立地する（第1・2図・図版1）。

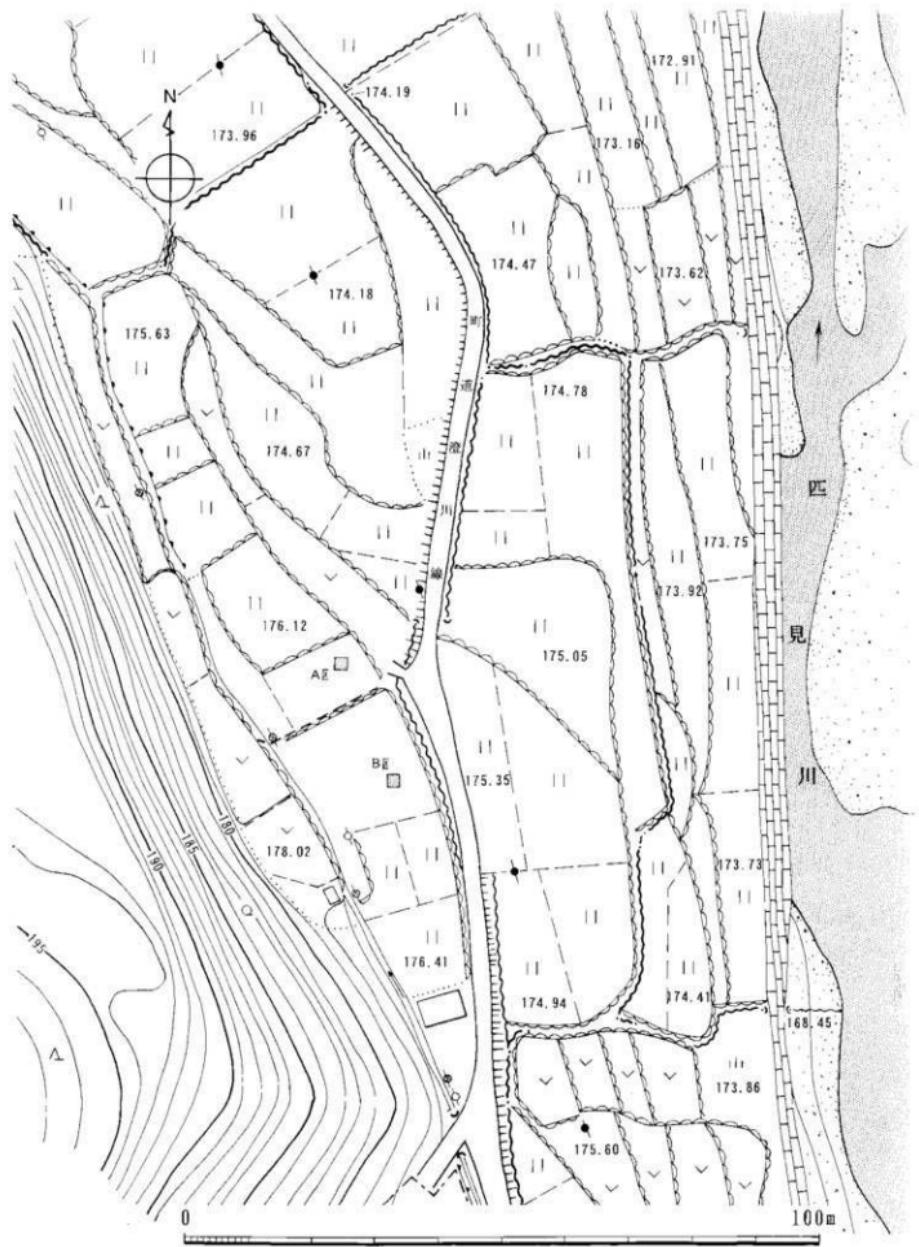
歴史的環境 本地区における周知の遺跡は、慶長年間（1596～1615）から大正5年まで在存したと伝えられる「長蓮寺跡」（第2図）のみで、原始・古代遺跡は勿論のこと、他にも顕著な歴史的痕跡のものはない。

今のところ史料的初見は、永和2年（1376）に成るという「益川本郷御年貢井田數目録帳」および「益川本郷田数注文」^[註1]に、本地区を指すと想定できる「黒河 物三郎分」が確認される。ただ本史料では物三郎が用いられており、現在の持三郎とは異なるものの、黒河（澄川）と連名されていることからみて、それは本地区を指しているものとして判断してよいだろう。このことから南北朝において、既に益田氏によって奥十二島地域として、最上流域に当たる本地区が支配されていたらしいことが判るのであるが、明確な本百姓層の名主制によって成立していたものかは確かではない。物三郎という耕地名に「分」が附けられていることから、それは山間地という僻地、しかも狭小地という立地性からみて、恐らく準名主（小百姓層）級の間人（もうと）層であっただろうと考えられるのである。ただし澄川とする本地区内は、該当期には斎藤氏から分流したと考えられる澄川氏が居住していたことが確かであることから、同氏族が本百姓級としての名主制を確立していた可能性も残していると考えられるのである。

なお、地内の小塹には明治期まで存在したといわれる組神としての大元社跡があり、また宍見川河畔のハツ表の岩類には小祠があったといわれ、鎌倉期の大水害によって流失したという伝承が残っている。そして、そこには対岸の山地から崩落した大岩も見られ、その時に7人の早乙女が落命したともいわれ、興味ある民俗譚も伝えられている。

（渡辺 友千代）

〔註1〕 井上寛司・岡崎三郎編集『史料集 益田兼見とその時代—益田家文書の語る中世の益田(1)』、1996年2月発行



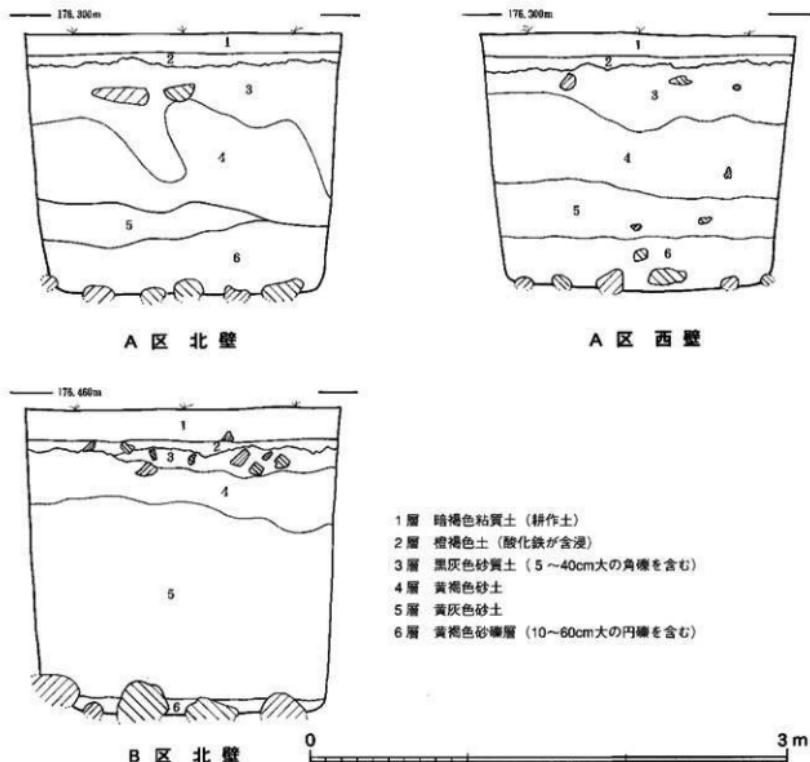
第3図 配置図(1)

第3章 各調査地点の概要

第1節 山根ノ下地点

1. 位置と地形的立地

本地点は、島根県美濃郡四見町大字澄川イ80番地ほかに所在する。そこは北西側方向にUの字状に形成された河岸段丘のうちの、その上流側に当たる南東端の水田域である（第2・3図・図版1・2-1）。



第4図 土層堆積状況図（1）

現地の標高は約176.25mで、地点の東側70mのところを比高差約4mを測って、匹見川が北流している。また地点の北側へは水田と化した河岸段丘が拡がっているものの、一方の南側へは次第に尖滅するといった地形的立地にある。

2. 調査の概要

(1) 調査区の設定

調査区は2mの方形区のものとし、段丘面のやや高位に当たる山裾側寄りに、A・B区とする2箇所を任意に設けたのである（第3図・図版2-1）。

(2) 層序の状況

A・B区との設置地点は、約60m測って地点差はあったものの、2区とも基本的な層序には差異はなかった。

その層序は、上位から1層の暗褐色粘質土、2層の橙褐色土、3層の黒灰色砂質土、4層の黄褐色砂土、5層の黄灰色砂土、6層の黄褐色砂疊層の順で堆積していた（第4図・図版2-2~5）。

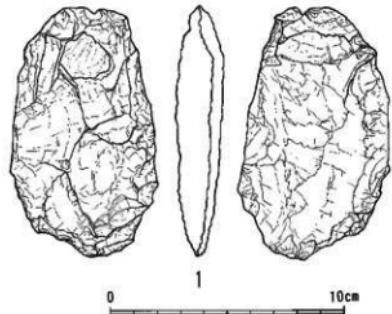
このうちA区の層序は、B区と比べて黒灰色砂質土層（3層）は、20~35cmを測って特に厚く、部分的には90cmの層厚もみられたのである。また、本層には20~30cmの河原石を含んでいて、やや砂質性であった。そして4~6層は砂土で、6層の上位までは疊もみられなかったものの、砂土という状況から匹見川の旧流域であった可能性が窺われた。なお出土物については、掘削中には確認できなかったものの、その廃土から1点の打製石斧を採集している。これは層位的に未確認であったものであるが、層序状況からみると恐らく黒灰色砂質土の3層であったものではないか、と炭化物などの出土状況から想像する（第5図・図版2-6）。

B区は、A区と同様の堆積状況であったが、とくに3層の黒灰色砂質土は薄く、部分においては尖滅もみられた。そして5層は、1.3mを測って厚く堆積するといった、A区とは層位において若干の違いがみられたのである（第4図・図版2-4・2-5）。なお、本区における出土物は、3層における炭化物、そして2層の鉄滓・陶磁器類で、遺構は確認できなかった。

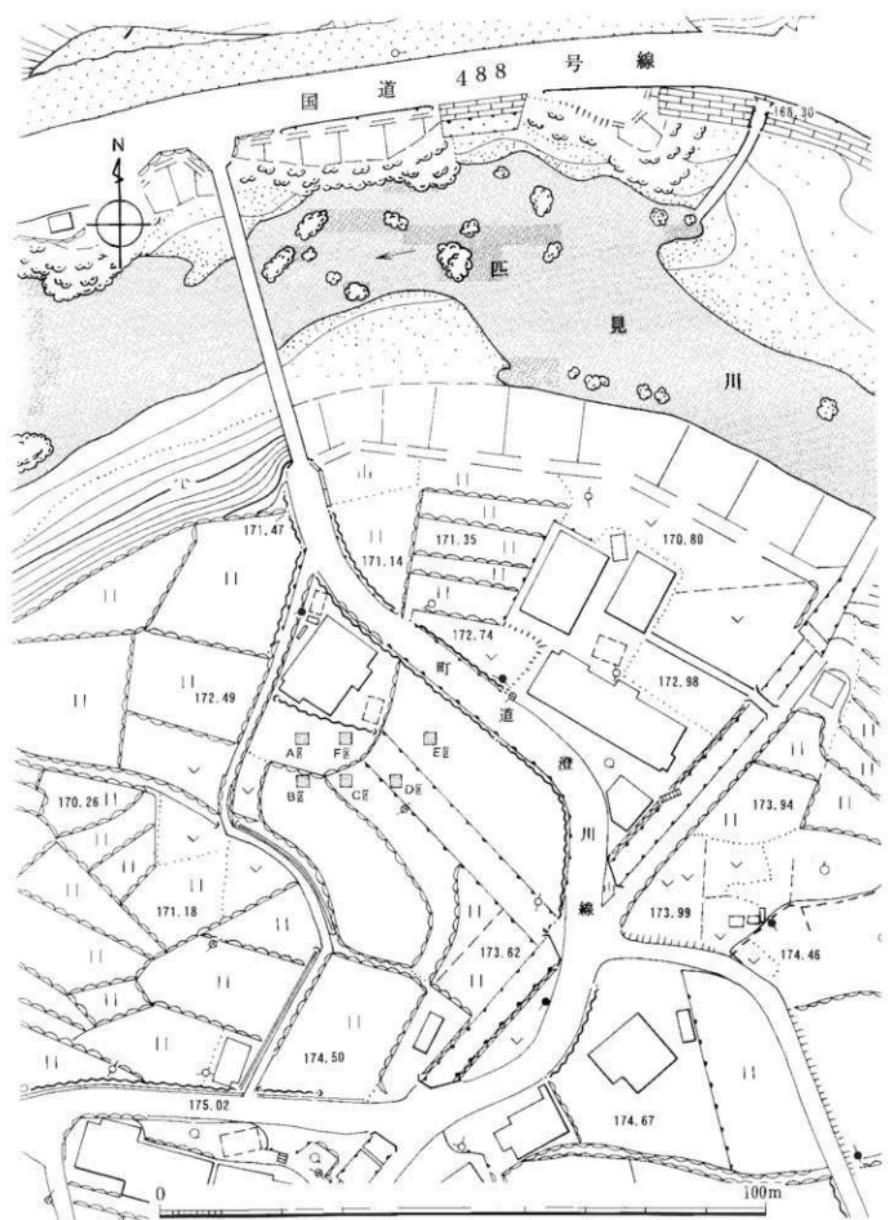
(3) 出土遺物

本地点で1点の打製石斧が採集された（第5図・図版2-6）。これはA区の掘削廃土からのものであり、したがって層序的包含層は明確ではない。ただし本区のいずれかの層位に伴うものであることは確かであり、それは層位的にみて、他に炭化物が伴っていることから3層の黒灰色砂質土であったのではないかと想像している。

石材は凝灰岩質で、剥離痕は明確であるものの、灰色を呈して腐朽する。最大器長10.7cm、最大器幅6cmを測り、重さ152gである。背面側にやや反りがみられ、周縁部から数打の打裂が段をもって成形しているが、腹面側には単純的で顕著でない。なお、この打製石斧の採集から本地点域は縄文遺



第5図 出土遺物実測図(1)



第6図 配置図(2)

跡であることが確認できたが、他に上器などを作っていないので、具体的な時期については明確にすることはできなかったのである。また、B区では2層において7点の鉄滓が出土した。

第2節 舟戸地点

1. 位置と地形的立地

本地点は、島根県美濃郡四兄町大字澄川イ60番地ほかに所在し、そこはUの字状を成して匹見川が周流し、一方で河岸段丘は突出したように形成された、その突出城に当たる（第6図・図版3-1）。

現地の標高は、173.37m～173.88mを測る水田域で、北側50mには匹見川が廻り込んで西流し、一方の南側は、約200mを測った地点に山裾が東～西方向に延びているといった地形に立地している。

2. 調査の概要

(1) 調査区の設定

調査区は2mの方形区のものとし、地形的立地を考えて任意に、まずA区・そしてB区という2区のものを設けることから始めることにした。そして掘削の段階で、A区において遺物が出土したので、さらに4箇所を西側に増設し、その地区名は左通りにC～Fまでのアルファベットを冠して呼称することにしたのである（第6図）。

(2) 層序の状況

本地点域における基本的層序は、1層の暗褐色～灰褐色した水田耕作土、2層の酸化鉄が含浸した橙褐色土（客土）、3層の黒灰色砂質土、4層の黄褐色砂土、5層の黄灰色砂土、6層の棕褐色粘質土、7層の黄褐色砂礫層（河床礫）の順で堆積する（第7・8図・図版4-1～5-2）。

このうち1層の耕作土は、A・C区の2区において2次的に形成された様子が窺われ、また客土である2層でも捉えられたのであった。これは標高がやや低位に当たる調査区でみられ、おそらく水田のマチダオシといっている再造造成によって生じたものであろうと捉えられる。そしてE・F区のように、標高が僅か高い地点の調査区では2重構造というより、3層の上位が消去あるいは尖滅部分がみられるなど、逆に削平された様子が窺われたのである（第8図・図版5-1・5-2）。

全体的な層序状況は、1層の耕作土以外には砂質、あるいは砂土や砂礫で堆積しており、そこには河端もしくは河道で生成された立地性が読みとられる。ことに黄褐色砂土の5層は厚く堆積し、E区では1m以上を測ったのである。そして、1～6層までの層序においては殆ど、遺構に関わると考えられる以外、気になるような石疊もみられなかったのである。

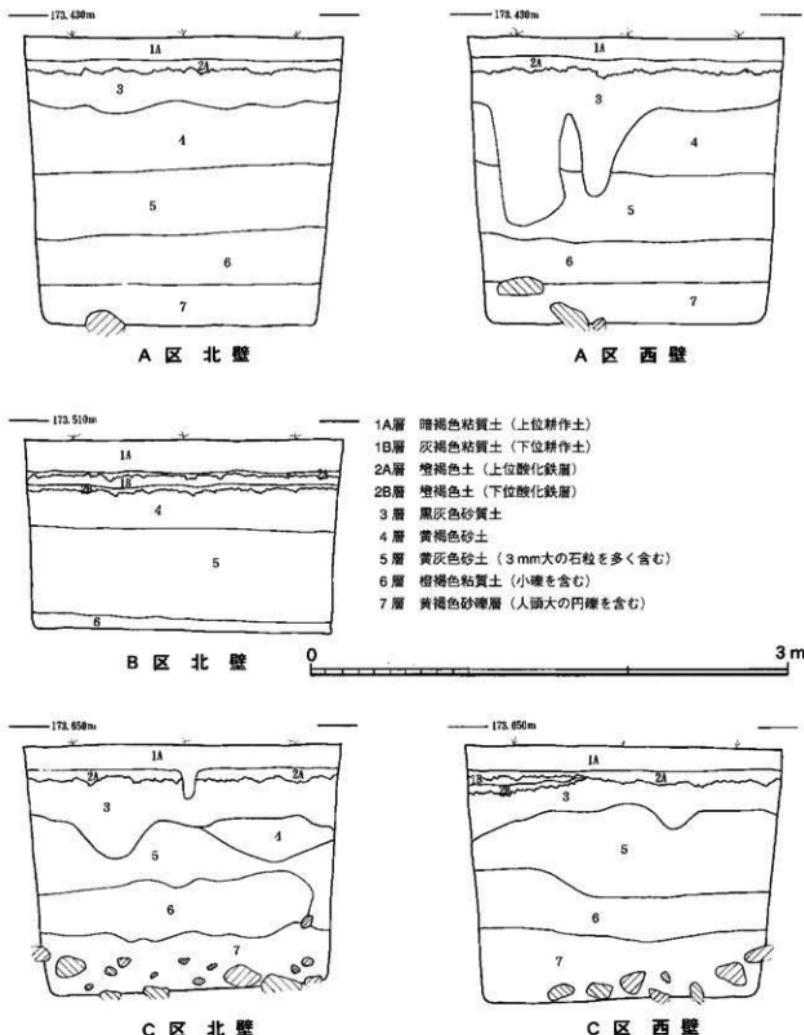
なお遺物・遺構の検出層は黒灰色粘質土の3層で、遺構は4層との層界に表出した。

(3) 遺物・遺構の検出状況

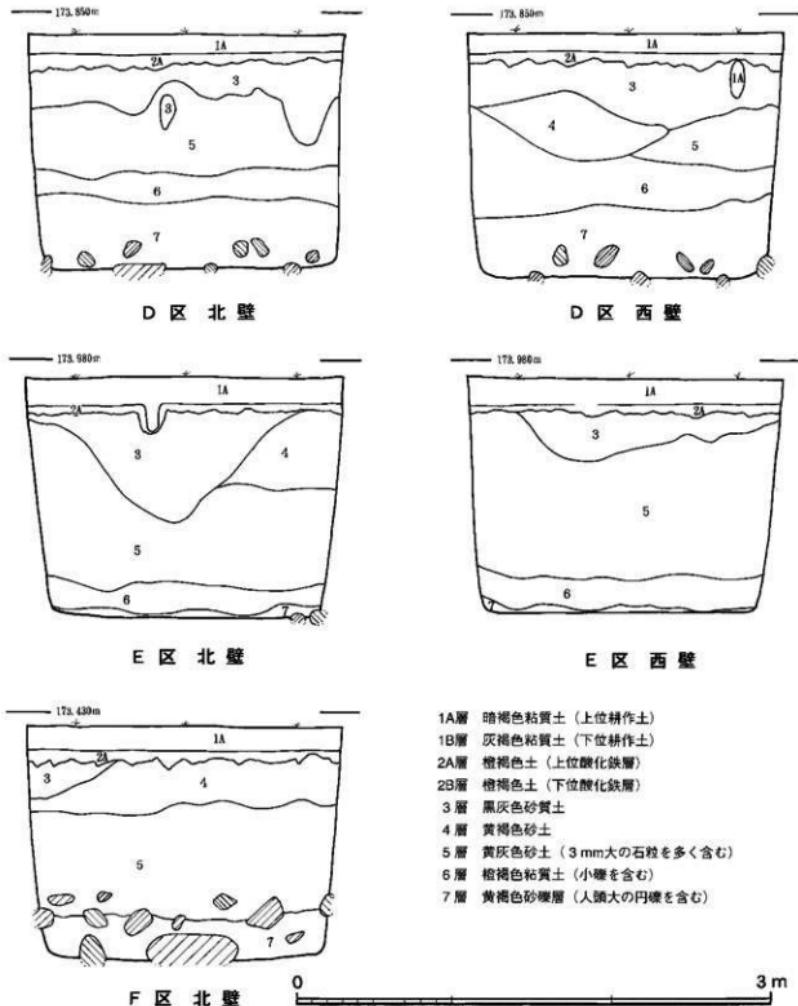
本地点からは縄文土器39点、石器剥片4点、弥生土器8点、土師器13点、須恵器1点、瓦器2点、陶磁器42点、金属類1点、鉄滓18点、そして炭化物が出土した（第1表）。

このうち縄文土器・石器剥片は黒灰色粘質土の3層を中心に、弥生土器それに土師器類もそうであった。そして陶磁器類や鉄滓などは1・2層の人為層から出土したものであった。また地区別にいようと、縄文遺物・弥生上器・土師器などはA・C・D・E区で検出され、他の歴史遺物はそれ以外の地区でも出土したのであった（第1表）。

遺構は、C・Eの2箇所で検出され、それは3・4層との層界面であった（第9図・図版3-4・3-5・4-2・第1表）。



第7図 土層堆積状況図(2)



第8図 土層堆積状況図(3)

このうちCIXでは4基の土坑、その土坑内の2基からはピット状の陥込みも捉えられた。うちSK03とした土坑は、層界面からみる限り短径約61cm、長径110cmの不整形、深さ13cmを測るものであった。そして坑上に径25cmを測る河原石1体が確認されたが、これは遺物の垂直分布状況、また立石

状の様態などから同坑に伴うものと判断した（第9図・図版3-4）。したがって本坑は、坑界を見逃していると思われるが、その石体位置から構築されたものと想定する。いずれにしても砂質・砂性ということもあって、遺構の坑界は明確なものではなく、貧弱なものであった。

(4) 実測遺物（第9図・図版5-3）

1は、A区の3層から出土した口縁部片。外面に貼付けた降帯をもち、その上・下部に竹管ふうの施文具の外面で押引きを施している。器面は内外とも条痕の後ナデで、短く内折し、器肉は薄手。焼成は良好で、色調は灰褐色である。2は、D区の3層から出土した胴部片で、やや厚手のもの。内外面とも条痕調整とし、内面はナデ仕上げ。胎土には筋状の炭化物がみられ、鐵維土器の可能性もある。

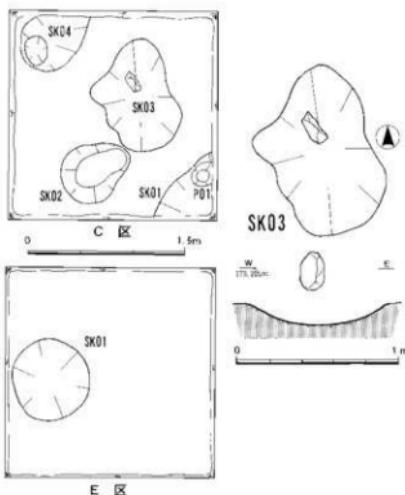
外面には煤が付着して黒褐色を呈するが、胎土・内面は橙褐色である。3は、D区の3層から出土した胴部片。内外面とも条痕調整とし、内面はナデ。胎土には若干の石英を含み、橙褐色であるが、器肉は灰～暗褐色を呈する。

4は、D区の3層から出土した胴部片。内外面とも条痕調整で、とくに外面は粗いが、内面は磨きに近い精緻なナデ仕上げである。器肉は薄く、胎土は灰色であるが、器面は暗褐色を呈する。5・6は、D区の3層から出土したもので、内外面とも条痕調整で、前者の胎土には石英の砂粒を含む。色調は両者とも橙褐色で、焼成は良好。7は、C区の3層から出土したもので、内外面とも条痕調整。胎土の色調は橙褐色であるが、内面は炭化物が付着して黒褐色を呈する。8は、D区の3層に出土したもので、調整は内外面とも条痕で、厚手のもの。胎土に石英の砂粒を含み、色調は橙褐色を呈する。

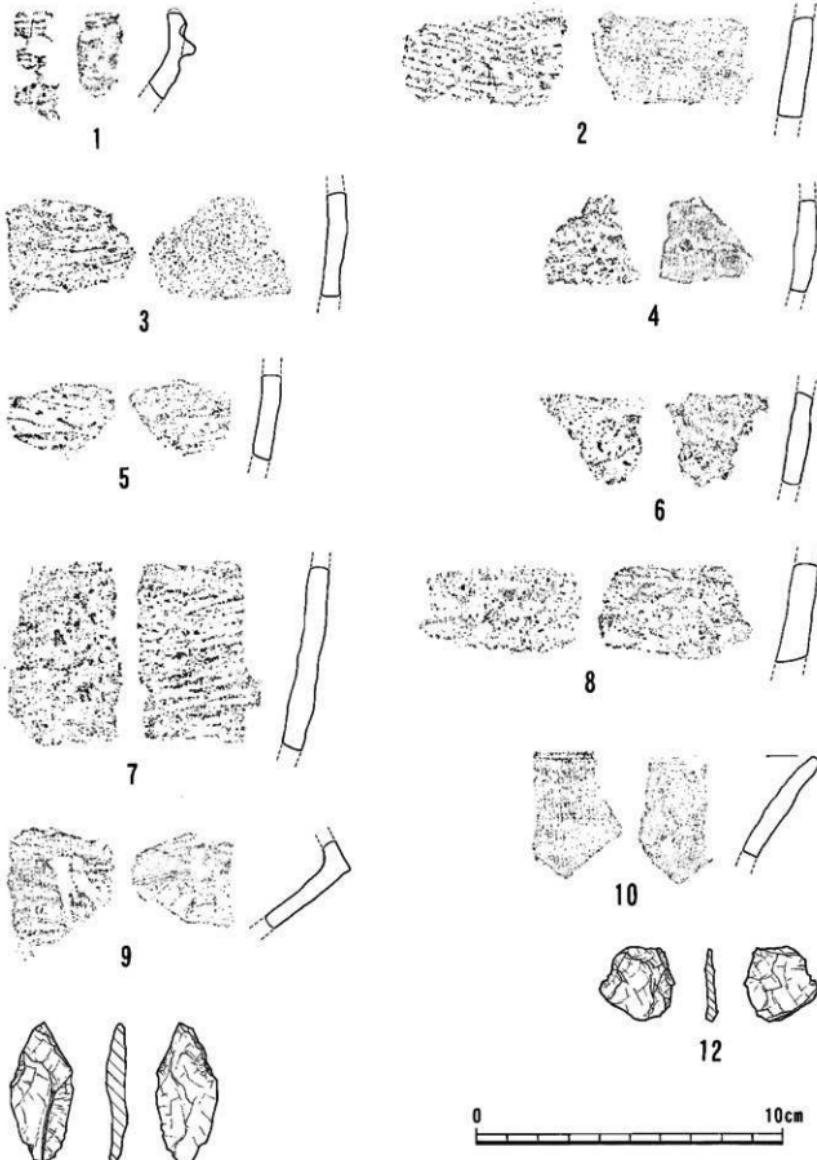
以上、1～8について概略的にみてきたが、口縁部の1を別として、ほとんどが特徴を見出すことのできない胴部片ということもあって、明確な時期的位置付けはできない。ただし1が縄文前期に位置付けられるものであり、その成形調整と類似していること、また比較的薄手などということから、以上のものは押引文系に伴うものと想定している。

9・10は、A区の3層に出土した精製系もので、このうち9は外反して立ち上がり、頭部で反転する、といった部界片のもの。内外面ともヘラ貝状のもので精緻に磨かれ、色調は淡橙色を呈する。10は、強く外反した口縁部で、内外面とも精緻に磨かれ、胎土は橙色を呈するが、器面の色調は黒褐色である。両者とも磨研土器の浅鉢系のものである。

11・12は、C区に出土した石器の剥片である。このうち11は、凝灰岩系のもので、器面は腐朽して灰白色を呈する。形状は横長の刃状を呈するが、周縁部は刃器の用を果たしておらず、また細部調整



第9図 遺構状況図



第10図 出土遺物実測図 (2)

第1表 出土遺物集計・構造計測表

地点	層別	調査区 (白)	地質		有機物 少量	無機物 少量	金銀類 少量	鉄洋 少量	化物 少量	計	
			黒褐色土	砂質土							
山根 ノ下 地区	A 3 層	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
	B 1-2層	-	1	-	-	3	-	7	-	7	
	2 層	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
	3 層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
計		1	-	-	-	3	-	7	-	11	
A 1-2層		-	-	-	2	25	1	15	-	43	
区 3 層	1	-	8	3	-	1	-	-	-	13	
B 1-2層		-	-	-	3	-	1	-	-	3	
区 3 層	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
C 1-2層		-	1	-	-	1	-	-	3	5	
区 3 层	3	-	12	3	7	-	-	-	-	25	
D 1-2層		-	2	2	-	4	-	-	-	8	
区 3 层	3	-	16	3	1	-	-	-	-	20	
E 1-2層		-	1	-	-	7	-	-	-	8	
区 3 层	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
F 1-2層		-	-	-	-	1	-	-	-	-	
区 3 层	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
計	4	39	8	13	1	21	42	1	181	-	128
A区 1-2層		-	-	-	-	-	24	-	-	-	24
小田原 地区	2 層	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
H 地区	C 1-2層	1	-	-	-	-	5	-	-	-	5
田原 地区	3 层	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1
点	D区 1-2層	-	-	-	-	2	4	-	-	-	6
計		-	1	-	-	2	34	-	-	-	37

地区名	通構	幅広 (cm)	延長 (cm)	深さ (cm)	厚さ (cm)
角口	P01	21.5	-	21.5	173.095
地区	SK01	-	-	4.5	173.095
点	SK02	36.5	69.0	14.5	173.095
	SK03	61.5	110.0	13.0	173.090
	SK04	51.5	-	13.0	173.090
	BL区 SK01	76.5	80.5	9.0	173.030

もない。12は、安山岩質の石材で、意図的な剥離法や利器としての機能はみられない。ただの石器剥片、または碎片であろう。

第3節 小田原地点

1. 位置と地形的立地

本地点は、島根県美濃郡匹見町大字澄川イ151番地ほかに所在し、そこは小田原あるいは小田、という地名で呼ばれている。

前節で記述しているとおり、持三郎という本地は三日月状を呈した河岸段丘に形成されているが、本地点はその尖状部に当たる下流域に位置している。そのため下流方向は尖滅しており、また僅か掠がりをみせる上流側といつても山裾がせまっていて傾斜地を成している（第2・10図・図版1・6-1）。

2. 調査の概要

(1) 調査区の設定

調査区は数段からなる水田のうち、広く、しかも周りとの段差が少ない場所を選んで設定することにした。その結果、第11図に示したとおりで、4地点としたのである。いずれも2mの方形区とし、地区名は掘削の調査順に従って、A-Dのアルファベットを冠して称することにした。

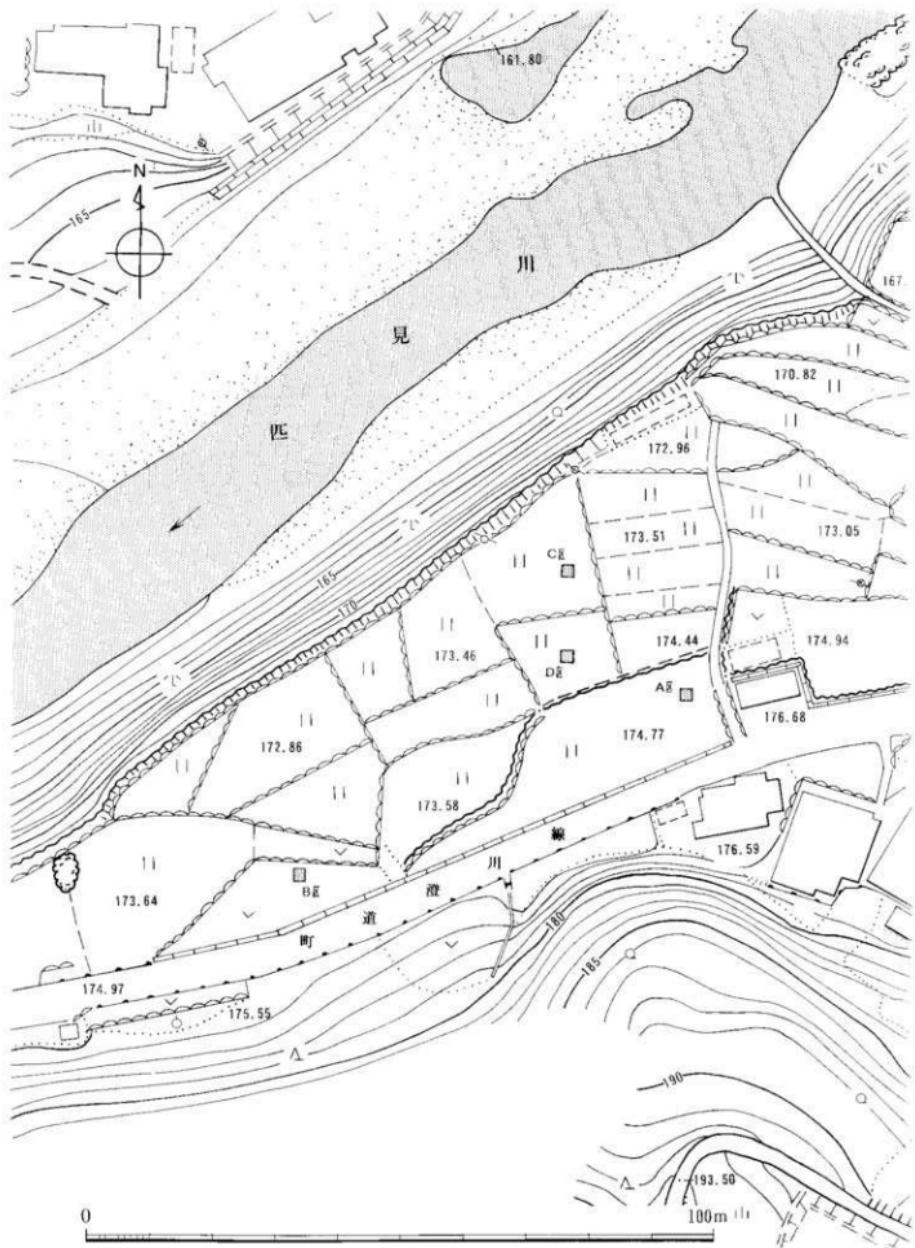
(2) 層序と遺物出土状況

調査地点名を一括して小田原としているが、各調査区ごとに位置差があるため、その差異から層序も一律ではなかった。したがって区名順に従い、若干の概要を説明しておきたい。

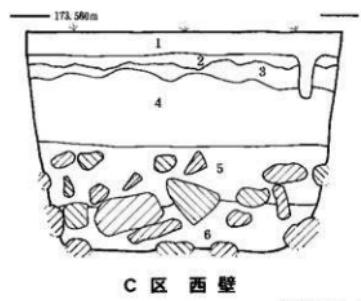
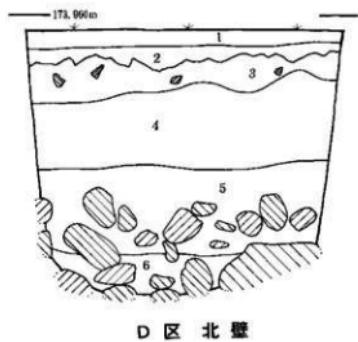
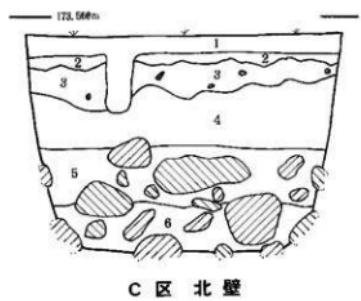
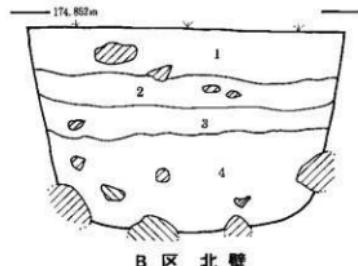
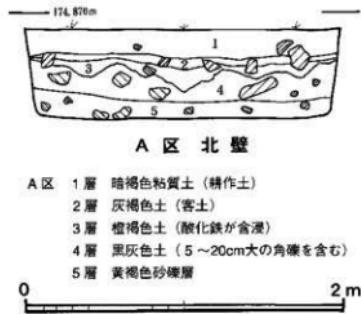
A区は、地点域の東側に設けたもので、1層の耕作土（暗褐色粘質土）、2層の客土（灰褐色土）、3層の橙褐色土、4層の黒灰色土、5層の黄褐色砂砾層の順で堆積していた（第12図・図版6-2）。このうちの1層の耕作土を除き、いずれの層序とも10-30cmを測る円礫が充填し、とくに上位層は石体も大きく、下位層に向かっては小礫が充填するといった具合であった。

遺物は、1・2層の人為層ともいえる層位に、近世期以降の陶器類が24点採集された（第1表）。ただし、それ以下の層序では遺構は勿論のこと、遺物は皆無であった。

なおA区における掘削は、表面から約60cmで基盤層の河床礫に至ったため、以下はその可能性は薄



第11図 配置図(3)



第12図 土層堆積状況図(4)

いと判断し、浅度の掘削であったものの、そこで止めることにした。

B区は、段丘面が狭まっていく下流側に設けたもので、表面標高約174.75mを測る地点の調査区である。その層序は、1層の耕作土、2層の暗褐色土、3層の黄灰色砂土、4層の黄褐色砂礫層の順で堆積していた（第12図・図版6-3）。ただし出土物といえば、1層の耕作土に1点の陶磁器片のみで、以下のいずれの層位には遺構とも検出できなかったのである。

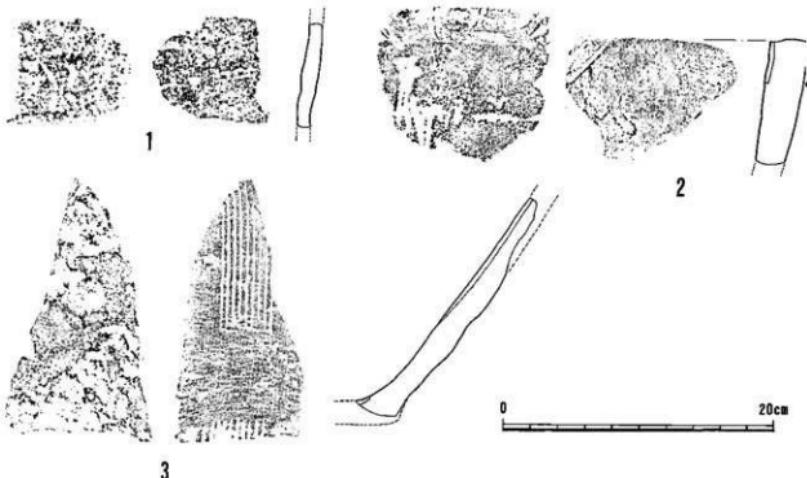
C・D区は、調査対象域の上流側の河寄りに設けたもので（第11表）、2区とも12mを測るといった近接していたためか、層序状況は類似する。

その層序は、1層の耕作土、2層の橙褐色土、3層の黒灰色砂質土、4層の黄褐色砂土、5層の橙褐色粘質土、6層の黄褐色砂疊層の順で堆積していた（第12図・図版6-4・6-5）。このうち2層の橙褐色土は、酸化鉄が含浸したもので、実質的には3層として捉らえるものかもしれないが、色調から「応分層した」ものである。なお遺物は、C区の3層から1点の縄文土器が、そしてD区の1・2層から瓦器質の2点が出た（第13図・図版6-6）。また陶磁器類も両区から合わせて9点が採集されたのである（第1表）。なお、C区の3層から1点の縄文土器が検出されたが、遺構については確認することができなかった。

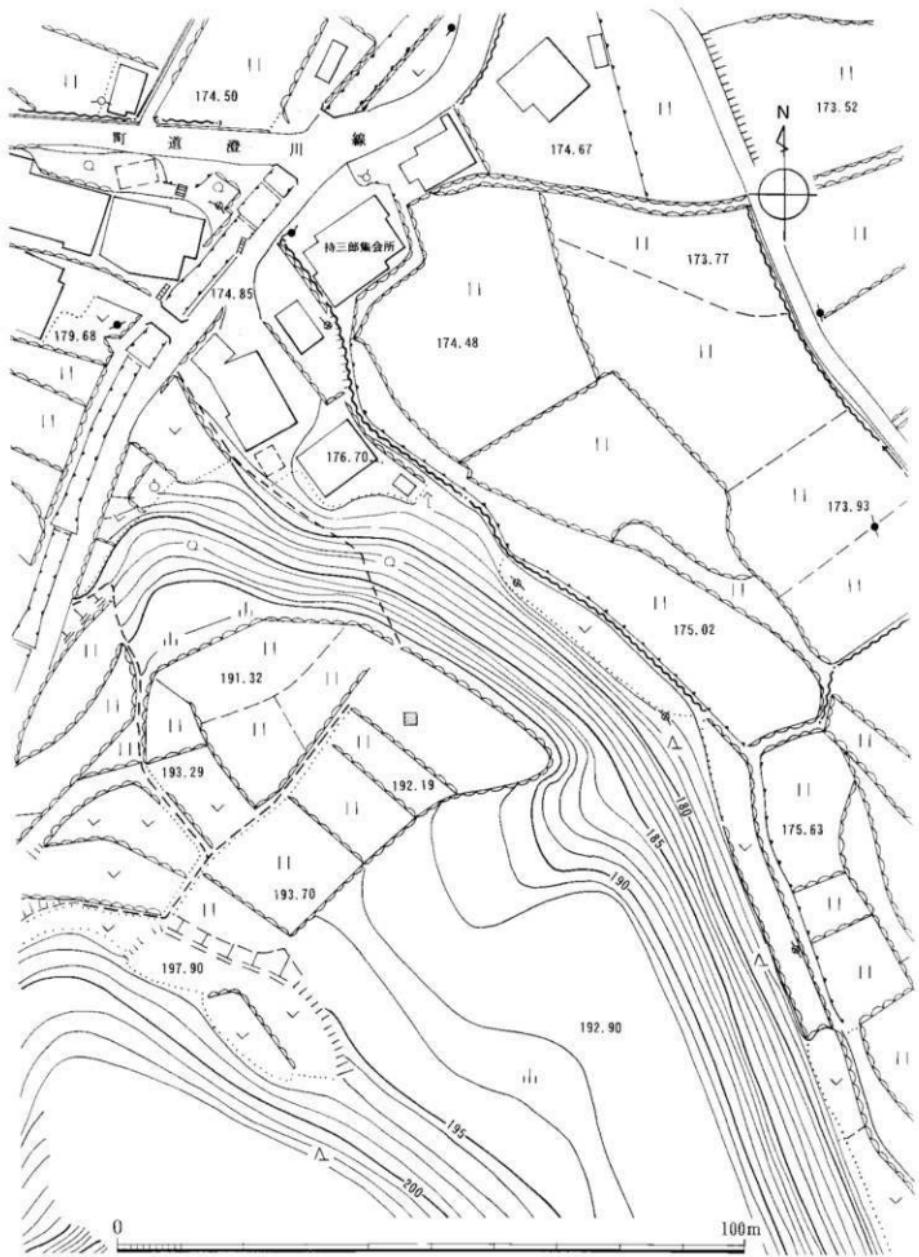
（3）実測遺物（第13図・第1表・図版6-6）

本地点では34点の陶磁器類が採集されたが、いずれも近代のものであって、いちいち採り上げるに値するほどのものではないと判断し、以下は縄文土器1点、そして2点の瓦器質について掲示しておく。

1は、C区の3層から出土した縄文の脛部片。内外面とも条痕調整で、器肉は4mm前後で薄手。胎土には砂粒を含み、淡橙色であるが、内面には炭化物が付着して暗褐色を呈する。おそらく縄文前期のものであろう。2・3は、D区の1・2層で採集されたもので、瓦器質の擂鉢である。そのうち前者は、厚さ1.2cm前後を測るもので、外面の色調は灰白色を呈して腐朽し、内面は黒褐色である。そして内面の端部に、御目の一帯（2条）がみられることから擂鉢であることは判るが、時期的な詳細については判らない。そして後者は、擂鉢の脣底部片で、体部は直線的に外反したものの、外面は凹凸し



第13図 出土遺物実測図 (3)



第14図 配置図(4)

て調整は粗く、横ナデ。見込み部分の御日は9条單一で、底部端面は擦磨する。内外面とも灰白色を呈する。口縁部形態が判らないので明確的ではないが、成形調整または御日の施文などからみて、室町前半期のものであろう。

第4節 家ノ前・上ノ原地点

1. 家ノ前地点の概要

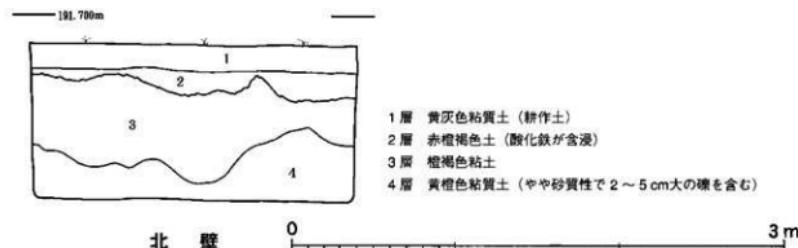
(1) 位置と地形的立地

本地点は、鳥根県美濃郡匹見町大字澄川イ92番地に所在する（第2・14図・図版1・7-1）。該当地は、本地区の2段に形成された河岸段丘のうち、その山裾側の上段部に当たる。そこは畠地化されており、調査地点の現地標高は約191.6mを測る。

(2) 調査の概要

調査区は同地点域の地形的立地をみて、任意に設定することにし、それは2mの方形のもの1区とした（第14図）。

層序は、1層の耕作土である黄灰色粘質土、2層の酸化鉄が含浸した赤橙色粘土、3層の橙褐色粘土、4層の黄褐色粘質土と順で堆積していた（第17図・図版7-2・7-3）。ただし、いずれの層序とも遺物・遺構は検出できなかった。



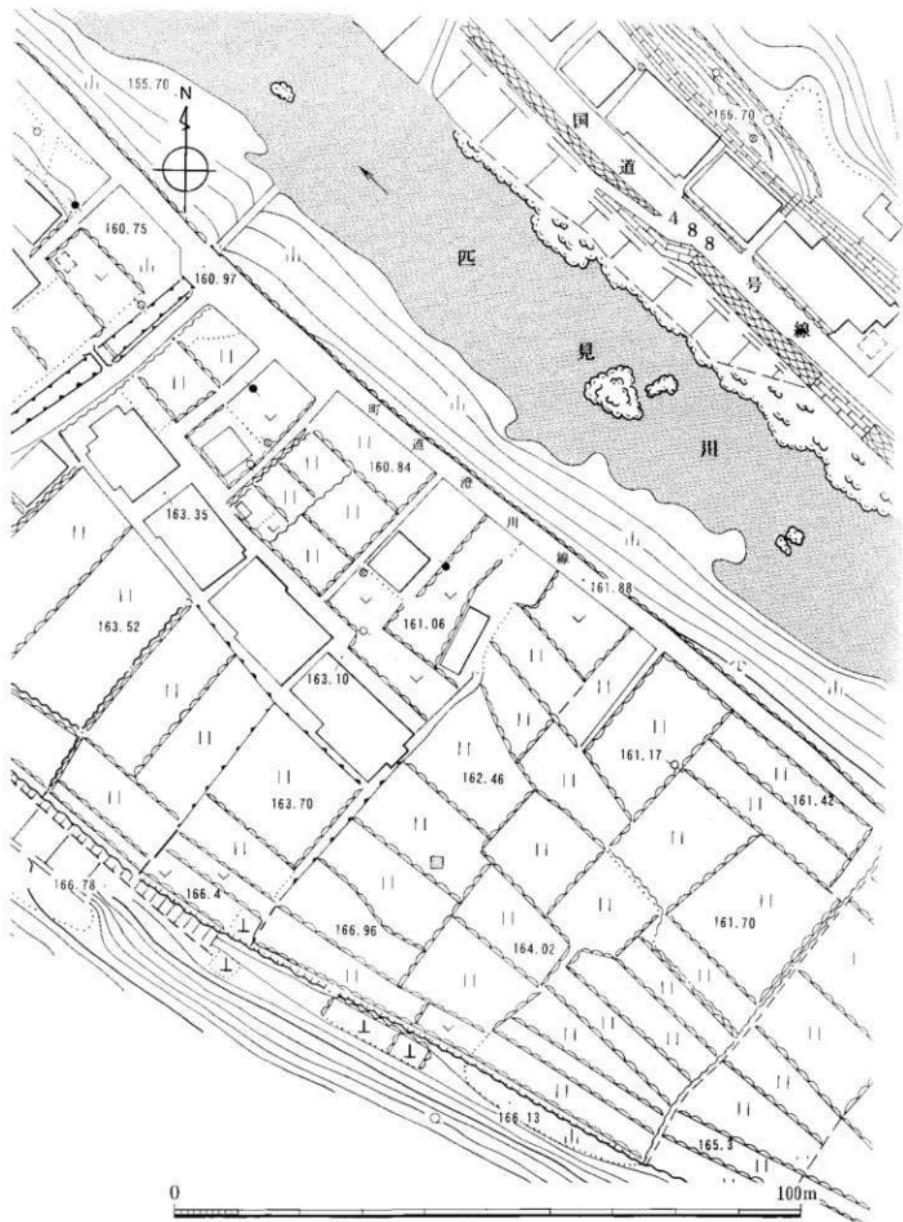
第15図 土層堆積状況図(5)

2. 上ノ原地点

(1) 位置と地形的立地

本地点は、鳥根県美濃郡匹見町大字澄川イ198番地に所在する（第2・16図・図版1・7-4）が、前述した各調査地点でいう持三郎地区とは異なり、本地点のみは三出原という地区に属する。

その三出原は、匹見下村時代（明治22年～昭和30年）には役場などの諸機関が置かれた地区で、調査地点はその上流端部に当たる持三郎地区に接した場所である。そこは匹見川が比較差約3mを測って狭長な河岸段丘を形成しており、その段丘上は水田また民家が点在する、といった景観に立地している。



第16図 配置図(5)

(2) 調査の概要

調査区は、やや山裾寄りの標高約163.75m測る水川に設定することにし、それは2mの方形のものを1箇所としたのである。

層序は、1層の耕作土、2層の酸化鉄が含浸した橙褐色土、3層の黄褐色砂土、4層の黒褐色砂土、5層の灰褐色砂土、6層の河床礫に順に堆積していた（第17図・図版7-5・7-6）。ただし1.5mにおよぶ掘削を行ったが、いずれの層序とも遺物・遺構の検出はできなかったのである。



第17図 土層堆積状況図（6）



凡 例

- | | | | |
|------------|-------------|-------------|-----------|
| ①. 五百田地点 | ②. 陣ヶ原古戦場 | ③. 杜ノ谷遺跡 | ④. 中ノ坪遺跡 |
| ⑤. 橋ヶ谷の宝塔 | ⑥. 土井跡 | ⑦. 紗玄寺跡 | ⑧. 門田遺跡 |
| ⑨. 清左衛門田遺跡 | ⑩. 殿屋敷遺跡 | ⑪. 積木谷の木地屋墓 | ⑫. 新井屋畠遺跡 |
| ⑬. 中ノ原遺跡 | ⑭. 加冷谷の木地屋墓 | | |

第18図 五百田地点と周辺の遺跡

第4章 三葛地区の五百田地点

第1節 紙祖三葛地区の環境

本地区は、匹見町大字紙祖のうちの小字単位の集落をさし、そこは本町の最南端に当たる。

南側は広島・山口との2県に接し、四周には西中国山地といわれる1000m内外の山地が立ちはだかり、まさに山間僻地である（第18図）。また地区を貫流する紙祖川は、その西中国山地の後冠山にあって西流し、そして僅かな谷平地をつくって北西流に転じているのである。平地といえば、その紙祖川がつくった標高500～530mを測る狭良な段丘面のみで、そこに僅かな水田が営まれ、また30戸ばかりの民家が点在するという景観にある。

こうした隔絶された山間地とはいえ、歴史的環境は比較的豊かである（第18図）。例えば集石遺構が頗著であった縄文時代前期の中ノ坪遺跡、また縄文時代後晩期の殿屋敷・清左衛門川遺跡などが存在しているとともに、詳細については明確ではないが、中ノ原では縄文時代早期以前の可能性をもつ遺跡も点在しているのである。また蓬莱山文鏡が出土した杜ノ谷遺跡、陣ヶ原古戦場と、いった中世期の歴史遺跡もみられ、とくに殿屋敷遺跡では戦国期における支配者階級の様子を理解する上で、極めて貴重といえる遺跡も発見されているのである。

これは重畠たる落葉広葉樹帯の山地が四周するという、そこには豊かな環境下にあったことに主因するものと考えられ、ことに縄文遺跡が頗著なのはそのためであろう。一方、中世とくに戦国期の遺跡もみられるが、それは本地区が領界城にあったということに由縁し、近世期においては広葉樹を利用した木地師の逗留地でもあったのである。

第2節 調査の概要

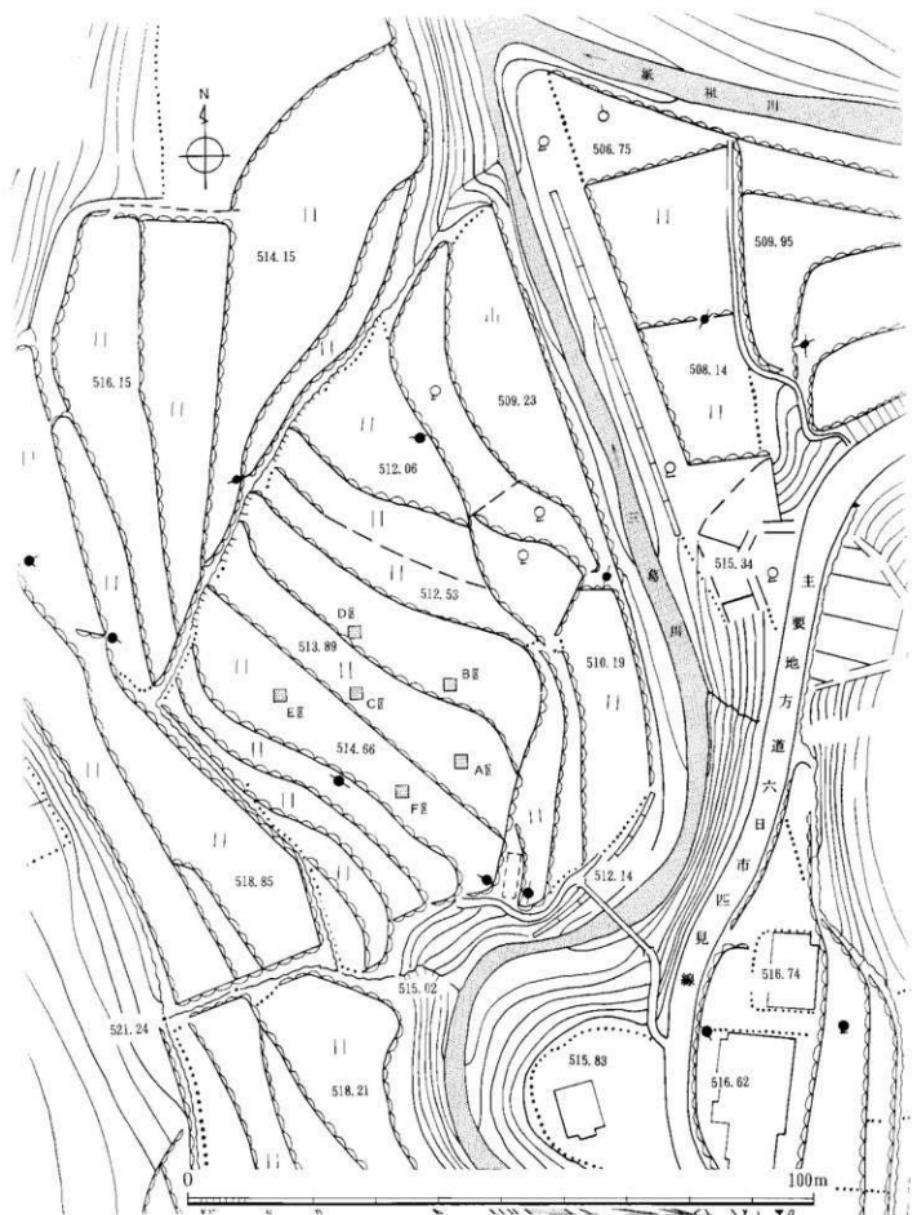
1. 地形的立地と調査区の設定

本地点は、島根県美濃郡匹見町大字紙祖ロ453番地ほかに所在し、そこは集落の西端部に当たる（第18図）。

傾斜に数段からなる水田がつくられた本地点域は、東側に北流する三葛川を、そして対する西側は山地がひかえているという513.48m～514.79mを測る標高域を調査対象とした（第19図・図版8-1）。また、三葛川は北東約100m地点で紙祖川と合流して北東流し、その左岸には周知の遺跡である陣ヶ原古戦場、そして右岸には中ノ坪遺跡をひかえているという歴史的環境にある（第18図）。

調査区は、比較的比高差の少ない細長い3段からなる水田に、任意に2mの方形区を設けることにして、最終的には6箇所となった。それは河寄りの中段に、まずA区と称するものを設け、そしてB区は北東隅の杭から北へ10m測って下段めに設定。C区はB区の南西隅杭から西側へ13m測って中段めの水田に、というように3箇所を任意に設定したのである。

その後、3箇所をまず掘削調査する中で、遺物の有無などを判断し、さらに設けたのがD～F区と称する3箇所のものであった。なお、これらの調査区もA～C区と同様、正規格に配置したものでは

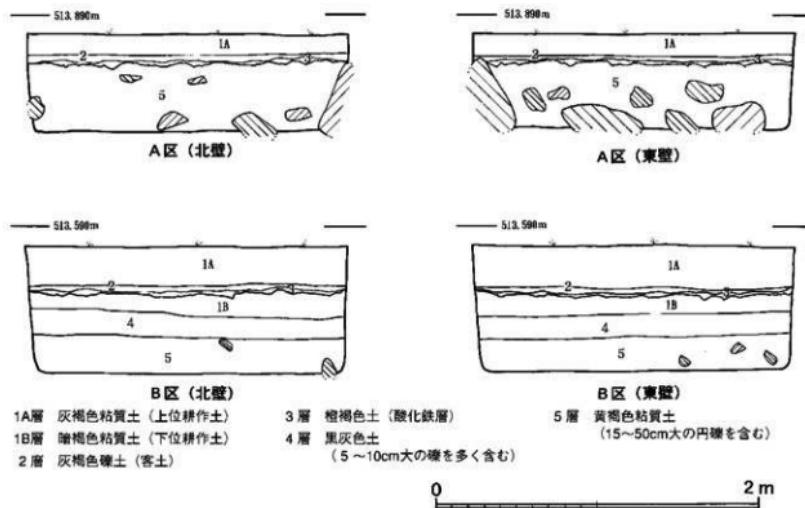


第19図 配置図(6)

なく、地形的を考慮して任意に設けたのであった（第19図・図版8-2）。

2. 層序の状況

本地点における基本的層序は、1層の灰褐色一暗褐色粘質土の耕作土、2層の灰褐色土疊土の客土、3層の酸化鉄が含浸した橙褐色土、4層の黒灰色土、5層の黄褐色粘質土の順で堆積していた（第20図・図版8-5）。



第20図 土層堆積状況図(7)

このうち1層をA・Bとに分層しているが、これはマチダオシという再造成によって生じたものと考えられる。またA-C, F区では5層の黄褐色粘質土が厚層で、それに対して4層の黒灰色土は尖滅部分から10cmを測る程度と極めて薄層であった。そして他調査区の北東側のものは逆で、つまり3層は厚く、4層は薄かったのである。これらは恐らく傾斜度の違いによる地形的立地によるものであろうと考えるが、層序順においてはいずれも基本的層序と類似していたのである。したがって縄文遺物が多出したA・B区の層序状況のみを掲示し、他は除いた。

第2表 出土遺物集計表

出土地	種別	青銅片	葉形石 (件)	石器	縄文土器	下鉢器	須恵器	陶磁器	金銀類	合計
A 1-2層		1					2		3	3
I区 4層		1	4		18	2				25
B 1-2層		1	1			1				6
区 4層上面						1				1
4層						1				1
C区 1-2層		7	1					3		12
D区 1-2層								2		2
E区 1-2層		6		1		2	4			13
3層					1					1
F区 1-2層		1							3	6
区 4層上面			1							1
合計		18	5	2	20	6	9	9		69

遺物包含層は、基本的には4層の黒灰色土に土器・石器剥片等の縄文遺物が出土し、また3層の橙褐色土から土師器が出土したのである。1・2層にも

縄文遺物そして土師器もみられたが、傾斜度という立地から水田造成時の搬入したものと捉えられる。

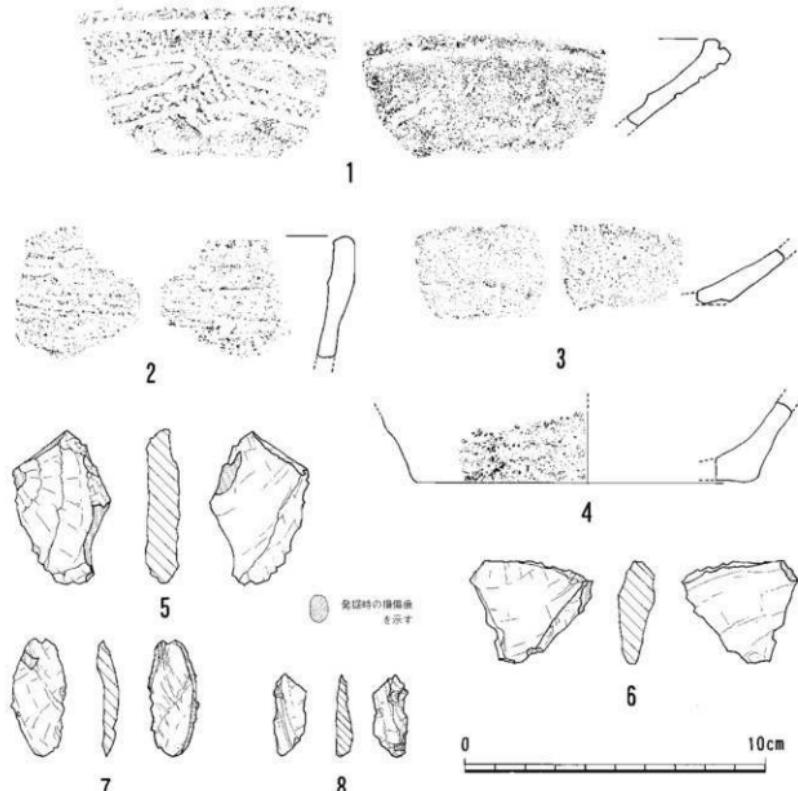
なお遺構は、A区において4・5層との層界面に検出されたが、詳細については同年度に発行した本格調査の『五百田遺跡』を参照されたい。

第3節 出土遺物と実測遺物

1. 出土遺物

本調査では石器片の23点（黒曜石を含めて）、縄文土器の20点、土師・須恵器の15点、陶磁器類の9点、金属類の3点に、それに利器としては2点の石鏃が出土した（第2表）。

このうち土師・須恵器類については、形態の判る口縁部は1点もなく、細片ばかりで、しかも3層



第21図 出土遺物実測図（4）

という上位部に出土したため、明確な位置付けはできないので除くことにしたい。また陶磁器・金属類もしかりで、現代のものであって、特別採り上げる程のものではないので除くことにした。なお2点の石鎌は、半部以上が損失した安山岩製、そして黒耀石の剥片は4点が乳白色、1点が黒色系のものであった。

2. 実測遺物（第21図・図版8-6）

1～4は、宿毛系の土器片で、本地点での縄文上器は全て本系統のものである。このうち1は、A区の4層黒灰色土から出土した浅鉢系の口縁部である。体部は、口縁部に向かって直線的に強く外斜し、その口端部は肥厚して、特に内面側に丸みをもつてふくらみをみせる。外面には2本沈線をもつて弧状文を描き、内面の縄文は磨消す一方、沈線の先端は入組み渦巻文を成す。また内面は、精緻に磨かれた様子が窺われ、頸部辺にはくの字状の段を成して下半に向かって細まる。胎上には2、3mmの砂粒を含むが、焼成は極めて良好。外面の色調は黒褐色、内面は橙灰色である。

2は1と同様、A区の黒灰色土から出土した粗製系の口縁部。内外面とも条痕調整のままで、口縁部はやや外向して立ち上がるが、口端部は僅か内向き気味で、やや肥厚する。口縁は僅か波状を呈し、器肉はやや薄手。胎上には2～3mm大的砂粒を含み、その色調は内外面とも橙褐色であるが、外面に煤が付着する。3は、A区の4層から出土した精製系の胴底部片。やや腐朽するが、内外面とも精緻に磨かれていた様子が看取される。色調は橙褐色を呈し、焼成は堅緻である。4は、A区の4層から出土した浅鉢系の底部片。接觸部はベタ底に近いものと思われ、調整は条痕の後ナデ仕上げ。焼成は良好、色調は橙褐色を呈する。

5～8は石器剥片類。このうち5は、E区の1・2層から採集した安山岩系のもの。腹面の右辺部には発掘時の損傷があるので明確ではないが、一部に2次加工としての剥離が看取される。6は、A区の1・2層から採集した玄武岩系の剥片。7は、F区の1・2層から採集した安山岩系のもの。8は、B区の1・2層から採集された乳白色系の黒耀石である。

（渡辺 友千代）



俯瞰した持三郎地区

図版2 山根ノ下地点



1. 北からみた調査地点



2. A区の北壁状況



3. A区の西壁状況



4. B区の北壁状況



5. B区の南壁状況 (南から)



5-1

6. 出土した打製石斧 (A区)

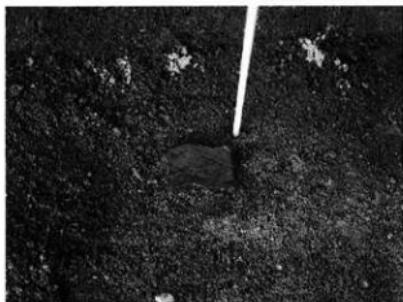
図版3 舟戸地点



1. 南西からみた調査地点



2. A区の遺物出土状況



3. C区の土器出土状況



4. C区の遺構表出土状況（北から）



5. C区の遺構検出状況（北から）



6. D区の土器出土状況

図版4 舟戸地点



1. E区の遺構表出状況（南から）



2. E区の遺構検出状況（東から）



3. A区の完掘状況（南から）



4. B区の北壁状況



5. C区の完掘状況（南から）



6. D区の完掘状況（南から）

図版5 舟戸地点



1. E区の北壁状況

2. F区の完掘状況（南から）



10-1



10-2



10-3



10-4



10-5



10-6



10-7



10-8



10-9



10-10



10-11



10-12

3. 実測土器・石器類

図版 6 小田原地点



1. 南西からみた小田原地点



2. A区の完掘状況（南から）



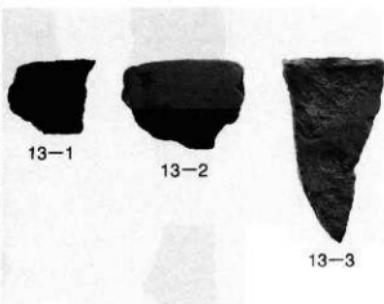
3. B区の北壁状況



4. C区の北壁状況



5. D区の完掘状況



6. 実測遺物（C・D区）

図版7 家ノ前・上ノ原地点



1. 南西からみた家ノ前地点

2. 北壁の状況



3. 南からみた完掘状況

4. 南西からみた上ノ原地点



5. 北壁の状況

6. 南からみた完掘状況

図版 8 五百田地点



1. 西からみた五百田地点



2. 東からみた作業風景



3. A区に出土した縄文土器



4. A区の完掘状況（北から）



5. B区の完掘状況（南から）



6. 実測遺物

平成12年3月13日 印刷
平成12年3月22日 発行

匹見町埋蔵文化財調査報告書第30集
匹見町内遺跡詳細分布調査報告書 XII

発行 匹見町教育委員会
島根県美濃郡匹見町大字匹見1260
印刷 株式会社 谷口印刷
島根県松江市東長江町902-59
